

1 はじめに

平成18年度は、行政改革にともなう予算削減と定員削減の嵐の中、空いた教授ポストが埋められず、弱小組織である附属天文台の運営は依然として容易ではありませんでしたが、皆様のご支援のおかげで何とか1年を乗り切ることができました。ご支援いただいた方々に、ここであらためて深く御礼申し上げます。

附属天文台(花山と飛騨)の構成員は平成18年度末の時点で職員と大学院生合わせて42人、うちわけは、常勤職員7人(教員5人、技術系2人)、非常勤研究員(PD)6人、非常勤職員12人、院生17人、となっています。これを見ても附属天文台は非常勤の皆さんと院生諸君の若い力で成り立っていることが一目瞭然です。これらの若い力を中心に、平成18年度も研究活動は活発になされ、論文18編(うちレフェリー論文は15編)が出版され、学会・研究会発表は184編(うち国際会議発表は45編、招待講演は11編)にのびりました。さらに、博士2人、修士6人が誕生し、両者を合せた数(8人)は前年に引き続き史上最高レベルとなりました。

平成18年度は附属天文台の様々なプロジェクトが着実に進展した年でもありました。藤原洋氏(ナノオプトニクス研究所代表取締役)の支援で実現に向けて動き出した3.8m望遠鏡計画の記者発表が8月1日になされ、マスコミで大きく報道されました。日本初の民間企業家による基礎科学(望遠鏡建設)支援というのが大きな理由だと思います。藤原氏は京大広報誌「紅胡」11号(2007年3月)に「事業家が基礎研究を支援する歴史の1ページを拓きたい」と見事なエッセイを書いておられますが、本当に頭の下がる思いです。宇宙物理学教室の長田教授、舞原名誉教授を中心とする大学連携(京大・名大・国立天文台)望遠鏡開発チームの奮闘ぶりも特筆すべきでしょう。附属天文台としては本望遠鏡プロジェクトを将来計画の最重要課題として位置付けています。9月23日にはひので衛星(Solar-B)がJAXA宇宙科学本部内之浦基地より見事に打ち上げられ、人類がかつて見たことがない素晴らしい太陽観測データが大量に地上に届けられるようになりました。これを受けて飛騨天文台の太陽磁場活動望遠鏡(SMART)は定常的に全データを世界へ配信し始めました。SMARTは毎朝リアルタイムデータをひので運用室に送るなど、ひので運用を全面的にサポートしています。また、院生諸君の多くはひので運用に参加しています。院生諸君にとっては、飛騨太陽観測の運用当番などもあって大変だと思いますが、この太陽観測の黄金時代に遭遇した幸運をぜひ研究面で生かしてほしいと思います。附属天文台としては飛騨の地上観測とひのでによるスペース観測をうまく融合させて、太陽研究の新しい時代をリードしていきたいと思っています。昨年始まった学術創成研究「宇宙天気予報の基礎研究」も2年目を迎え、11月には横浜(地球シミュレータセンター)で「宇宙天気モデリング」国際会議、翌3月にはアラスカ・フェアバンクスで「太陽フレアとオーロラの比較研究」国際会議を開きました。太陽と地球の研究者の交流が着実に進んでいます。この予算のおかげで、飛騨SMART全データのインターネット発信が可能となり、ひのでデータ解析センター(国立天文台)の整備も進みました。新しいプロジェクトも誕生しました。飛騨天文台のフレア監視望遠鏡(FMT)をペルーに移設するというプロジェクトです。これはCAWSES(Climat And Weather of the Sun and Earth Sysntem)の元で推進しつつあるCHAIN(Continuous H-Alpha Imaging Network)プロジェクトの一環として計画しているもので、SMARTが完成した現在、フレア監視望遠鏡の威力をさ

らに発揮させるために、地球の裏側に持って行こうとなったものです。元をたどると、3年前(2004年)のペルーの石塚睦先生、ご子息のイシツカ・ホセ博士の花山天文台訪問がきっかけでした。学問的意義、発展途上国支援、さらに石塚先生支援という点からも、ぜひ成功させたいと願っております。

本年度も、年に一度の一般公開、洛東高校、塔南高校の観測実習をはじめ、シニアキャンパス、ジュニアキャンパス、その他小中高大などの見学会は、花山飛騨あわせて10件以上ありました。少ない職員で、研究の合間をぬって、これらの実習見学に対応するのは大変ですが、子供たちの喜ぶ顔を見ると、見学に対応して良かったと心から思います。昨年、黒河教授の定年退職を機に始まったNPO花山星空ネットワークも、黒河名誉教授をはじめとする関係者の方々のご尽力(ボランティア)により、2006年度内に花山天体観望会を3回開催し、多数の市民の方々の参加を得、好評を博しました。2007年1月29日には設立総会を開催し、尾池和夫京大総長、田原博明京都府教育長、北村雅夫京大理学研究科長をはじめとする多くの来賓の方々にご出席いただき、門出を祝っていただきました。ここであらためて御礼申し上げます。NPOは形の上では京大附属天文台と独立の組織ですが、いわば附属天文台の応援団という位置づけで、急増する実習や見学の希望に対応するためにも、NPOの協力が不可欠となりつつあります。NPOはまだ生まれたばかりで事務職員を雇う資金すら不足しているのが現状です。皆様のご支援よろしく願い申し上げます。

最後にさびしい話ですが、飛騨天文台・技術専門職員の石浦清美さんが、本年3月末をもって定年退職となられました。石浦さんは、飛騨天文台創設以来42年間、縁の下の力持ち役として、望遠鏡、観測装置器械、建物に至るまで維持整備にご尽力され、文字通り中心となって飛騨天文台を支えて来られました。実は、飛騨天文台が現在の大雨見山に建設されたのも、当時(1964年)営林署に務めておられた石浦さんがサイト調査に来られた斉藤澄三郎先生を大雨見山に案内したのが最初のきっかけだったということです。石浦さんのこれまでのご尽力ご貢献に深く感謝したいと思います。

平成19年(2007年)10月7日
京都大学大学院理学研究科
附属天文台台長 柴田一成